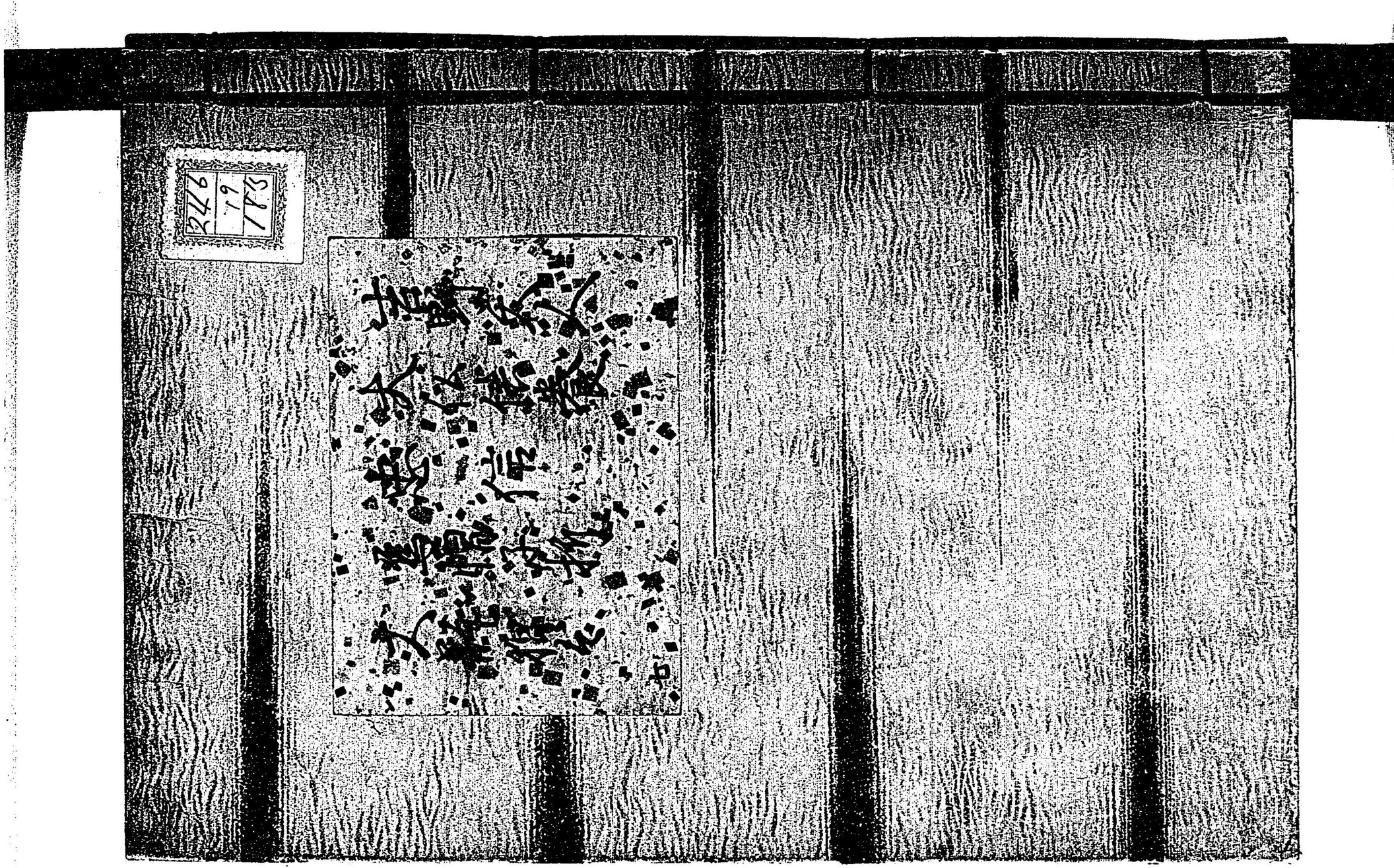


246-183

43. 10. 31

三月　三番目略脇能

吉野天人　前ニテ女後ニテ天人　ワキ男

九月　四五番目略二番目

大仏供養　シテ景清　ツレ方ワキ方　ツレ母朝敵ニ組シ朝衆

十月　四番目略二番目

忠信　シテ忠信　ツレ義経　ワキ法師武者衆

九月　五番目略二番目

烏帽子折　前ニテ男後ニテ熊坂長範　ワキツレ子方ワキツレ吉次ニ従ヒテ

九月　切能

大瓶猩々　前ニテ童子後ニテ猩々　ツレ猩々　ワキ男

吉野天人

宮ノ内ニ

奥ゆかしう

見えし都方ゝ住ひせる

者ゆゑ枕もかはし我妻ゝ成べき

花を一見仕ふ

ごふ詠め作法

稚子ゝ花と

ノ内ニ　ミヤコガタ　スマ　サクラ　トシ　ナカ　チモト　タチ　トリ　ヒト

伴ひ此度和州に下向仕候
（上歌）此春は殊に探花心の色香にそむや深緑の糸よりかけて青柳の露も乱るゝ春雨のよ降きるが花の朝志免ありて氣色もつゞく芳野の山は見えきり
（ワキ詞）急ぐ程に是ハはや吉野の山に着て候 此比ハ峯も尾上も花にて候 奥深く分入ばやと思ひ候
（シテ女詞）なふ／＼あれなる人ハ何ごとを仰候ぞ
（ワキ）さん候是ハ都の者にて候が此みよし野の花を承及始て此山に分入て候 又人やきやごとなき御姿なるが此山中に入らせ給ふ事ハいか成人にて渡り候ぞ
（シテ）是ハこの辺りに住者なるが春毎の

山に日数送り迎へあながち花を友とし
て山野に入りくらしたるばかり也 ワキカヽル〽言へ
ば花の友人は他生の縁といひなが
ら我らもおなじ心 シテ〽而も山路の
ともなれや 見もしらぬ人やそれの
友としるもしらぬも花の陰
相宿ありてもろ人の、いざなひしらる

まで花衣。袖ふれて木の本に
宿りいざや旅寝ん。宿や花のもと
にならば我が身をも忘るゝ美景によりて
花心別ちく旅寝をいざ明かし
てあかめん ワキ詞〽いかに申すべき事の候
に家路をも忘れて花に旅寝し給ふ方
はよく不審に社候へ シテ〽実に御不審

御(オン)事(コトワ)り今行(ユキ)てもとて
き我(ワ)が夫人なれど宛(アテ)ぶきく来
至(イタ)たり今宵(コヨヒ)は玄(クロ)き衣(キヌ)を振(タビ)井て信心(シンジン)
をいさゝか仏(ホトケ)もあらば其(ソ)の五
節(セツ)の舞(マヒ)小忌(ヲミ)の衣(コロモ)羽袖(ハソデ)を返(カヘ)
して忘(ワス)れやすき心(上カル)ぞらくこ
う不侍(サムラ)へと 上月 久(ヒサ)ぎえ旬(シバ)ふ宛(アテ)の陰(カゲ)

に 上月 く月の夜(ヤ)ぶ約(イウ)をまち給(タマ)へ乙女共(ドモ)
ニ 姿(スガタ)あらはしてく 上月 かあらび変(カハ)り来(キ)ら
と。幽霊(リョウレイ)頻(シキリ)仏(ホトケ)の声(コヱ)ぞかりやこゝ弥(イヤ)
そうきよそ守(モリ)ぶく 上月 中入来序(ツヨノ)不思(オモ)仏や虚(ソラ)
空(ウ)ふ音楽(ガク)空(キコ)ゆく異香(イキャウ)薫(タキ)て宛(アテ)ぶ妙(タヘ)
きり昌(ア)治(ヂ)ぶ 上月 下リ謡(ヨノ)又(マタ)出端(デバ)いひ(ヲ)
ぬ狂(クル)べやこの上(ウヘ)ぐ。琵琶(ビハ)琴(コト)和琴(ワゴン)に

しやうひちりきしやうこ羯鼓やうた行
の舞ともみえて袂は風の天津乙女
の羽袖を返して花よたはむれまふ
とよや乙女は幾度君が代をうたふなる
でし岩根もつきせぬや春の花衣揃
ふ舞遊び花何かりなくてるきみも
うへなき君の恵みに治まる国の天津風

雲の通ひち吹とぢよ乙女の姿とゞまる
まれに霞もたなびく三芳野のよしの
の山桜うつろふと見えしが咲く花
は空ふのりまて咲花の雲のはて
ゆくへもしらじぞかぎりなき

大佛供養

忘(ワス)レテ
わづの分(ブン)ゆるし給(タマ)へ
悪(アク)七兵衛(ヒヤウエ)景清(カゲキヨ)は
方(カタ)よひ(ヒ)ぢの。宿(シユク)
洗(アラ)ひ清(キヨ)め一七日(シチニチ)参籠(サンロウ)申(モウ)して
作(サ)り奉(タテマツ)らん南都(ナント)大仏(ダイブツ)供養(クヨウ)申(モウ)し

草も若草妹を一人おてや我よ
かねの打節(フリフシ)ゆき勝よ紛(マギ)き向顔(カウガン)さ
めの口へ今南おへてと忘作(エサシ)あもれやぎ
てへいよへもぽりも栄え花紅葉
乃ぽ寿家け秋のいろおもぜ思ぬ風
みさそわれてぽりも可ぬ都け宮
ぽへへ鄙(ヒナ)けうき住(スマヒ)居 なるぬ船の

うひもおくうイ矢け家よ生(イキ)ま死(シニ)来(キ)ま
上ゆ
ウ三笠け森乃このぎ頼(ラウ)ぬに
木(ギ)けおぐら(元又)へてぽいまぐぽ(元ブ)け安(ヤス)ら(イ下)け
ウ元斗下ぬ(イ下)も故へ乃(イ下)
キテふきりくぬ(イ下ニ下)
辺(ヘン)てイ急ぬ我よ南都若(ワカ)ま
和も尋ぜやと母(母下)ぬ我よ

景清も迷ほどしばくまするやらん南無
や三世の諸仏、十方の菩薩よ、二度
あともせてたび給へ（念ウケトーシテ下ニ）いうた事もない
わづみれきと（母）立ち寄りも。覚束（オボ）ない扉よ
あてりよ人も（トボソ）やらん。某ぢをば作
兄きまづいまして（母）先づもれ（シテ）入り

作へ拙迷ひいたづくまみらひつつぞ（シテ）さむ
じ西方乃かたにぬらひ。宿（シュク）乃（グワン）ふ乃ふ朝
うよ里とぶよ（ノボ）り清水よ参籠ル作
家よ。犬佛（念）法養ん由承れよ。か様ぢ
ま（フリ）節ぢ賤よ紛（マギ）ま。（オン）音（オト）ブレ乃為よ
参りてい（母）ねうぢくもまた里
ぢひて作。まして寿ねや（スベ）きりれ

たくまびまうさせてきこう（シテ）昌き今めか
きき作れ（ナニゴト）行ぶすまでもいやシテ
ぎまおまて（母）泊やひとりやすい頼朝
をねらひまうはや国なびく作ぶ
泊まてか（シテ）昌い思ひをよらぬ待な
て作きおぶら。西海まで七び給ふ
ぶ一門乃伍（オンドムラ）吊ひみそも泊べきこと思へ

ぎねらひやすも
どそも的（アス）思ふまらぬ発乃ま九黒沖
そ九届給へ（シテ上方ル）風りたぶよう
き毎（ス）九乃ま作供やこびて、
（母）泊沖なへべ（シテ）起（オキ）きび（上同ケル）寝を務、
でおおー（ヨ）ぶあうかひ子を隠（カク）そう
ひもの。景清（キヨ）ごろうち。母も哀（アハレ）ト

と思ひをよこして船のうちより扇
をもちて膝をたゝきて舞ひ出でたる
乃ち景清を引よせて
てゐるまゝ武略を施
げまうりおのれ
よりを主従隔
やまきたり

たるぞうおいてハ親心もの〻哀れ
門にわたり景清も見てハ涙ぞ
みづとともてひろうれしり〻也
きまあさの大物
牧狩
朽果ぬ源家の官軍右大将頼朝と
当秋ぞ也
立衆
かでもあれ〻もしまる
は聖武帝皇帝
帝ハ建立大仏殿よ

てれもまた
只平
又洪君ハ汪威光ハ
上立亮
御寺よあひよのふ
大仏益ハ汪く
やう〳〵やうこそ
やく喜乃日の三笠
乃よハ陰たゝき
法乃お壱乃ハ
後ニ云
供養をおゝぜ
面白
や奈良乃都ハ
後ニ云
御めきゝよあいもぜる
おまうで
我
敵

をうつむ謀もとこゝろいれもつゝ
ゐの乃悪七兵衛景清と組打をせ
きと人やまし。志ら浪浄衣よき鳥
帽子に我あぐらを思ひまる姿よき
やなうちものゝ時を降れく天下
ず長なる宮人乃せぐるを志ぎ

狩衣地こゝろ社ありびゐて人ゐ
こゞめそゐだみゐも上可廃ま
宮寺ゝ供養の場よ。志ゐる。こゝも
行者あれば前まで迎をまねるぞ
うこ乃きゐへ昌き春日の宮仕ゐ
おぢをゝゝ佛乃御供養場を清めゝ
役人なる行ゐこゝをこゞめ給ふ

卓カル 妻日祭ニそ。羽 是も伝乃河
供養 シテ おぶ 多波ヶ隔とやそ
仏も神も同一躰。もよもや乃ち
なって行とくえ そらひ給ふまつむ
とせ不ど非はお。君を守りて河
威光 シテ あらひまるか白張乃わき
より ろめる臭ニ 乃人玉ね ひろ
ま 口半 うもめ 上同 ちやてまりたる
言ば 元 ふろ
あらされ 元 元 元 天 責まれて
みとく立 ヂ 攻りと人影ま隠まけ
早 言語道断れ
る去そとねて作へ平家乃侍
悪七兵衛景清 アク シチ ビヤウエ

をねらひやすなをこめ程よ。誓を固(ゴ)めしよ
り付(ツケ)対(タイ)とらせぢやと。あ(上カル)。いふ。
いふて警(ケイ)固(ゴ)の兵(ツハモノ)。健(スコ)やかなる。
しまきたもの。きよとおも高(カウ)き。にて(ゲ)ぶ(上ハ)
ぎの。たもの皆(ミナ)一同(ドウ)に。おめ(ク)
こまつ(ク)ろて。ま(ク)ことの。
きまきば(ク)ら。ひと(タ)つ。
て時(ジ)節(セツ)を。待(マチ)
ぞはやまり。(カル)
悪(アク)七兵(シチヒヤウ)衛(エ)景(カゲ)清(キヨ)と。
のざみもとう(ク)。

其(シテ)時(ジ)景清まで。
家(イエ)立(タチ)のまでもこ。
きまきば(ク)ら。ひと(タ)つ。
て時(ジ)節(セツ)を。待(マチ)
ぞはやまり。(カル)
悪(アク)七兵(シチヒヤウ)衛(エ)景(カゲ)清(キヨ)と。
のざみもとう(ク)。

大伴ようりくいまだもかつて
聖を固めたれば四方の国ゆ奉りける
中たわらおおきそこに集ひ
そもやうときこしめさば
手をとりもちまち勝負をし
きたまり合うち景きよく昼となりと
ぜそこ初会をして彼あぎれを

ぱっかだをびおおきに立かくに金百両
ごだうそうとびこんわたちまちおぐろくこう
財帛も使べきと虚空よき声、
てうきたまりう

忠信　早川

是ハ判官殿ノ御内ニ伊勢ノ三郎
義盛ニて。拙者我君判官殿ヘ洩言
野を取こぼし座ル事。レヘト御使ノ註議
早ク今夜ハ計ニそろ北事一定ノやう
又申ス間ぜひやとなく
やと上ル。義盛ニしまりて居ル　判官　北方へ参りぬ

ワキ　曽て作　判官　拙僧今に何の為よ参りそ
カタルぞ　ワキ　さん候只今うし参る子細の儀
あらば　判官　当山の者だ心替りしや今夜
ようもせべきぞ一定への振よやと問況
や上べきあふし参りてた　判官　曽当
城みてカルか　ワキ　はんべ　判官　口惜や我いく
ぞその雑人のづき命を重ぬるぞ子
も朝敵の虚名をそそうそんそ為也ま
ふ当山乃衆徒討せべ犯を告ふて
る衆。皆倫よ天乃法加護あり。もと
角ふ我い夜よ入叶有を冥くべ。矩か
一人とどまり防ぎ矢を射ふは命をま
つそうそ。路次ふて追べき者やあま
義盛とそうひへ　ワキ　ば設曽追て家ふ去り

あぢらゞ甚もを始皆何國迄も供と社
ねんべきれ（オメル）ぢ
きて（デキ）真ふ行付（テ）られよう
こそ神ら（ワキ）が思つ（テ）ふ有（ル）ぢ（ヂ）ろべ仕（テ）急忠
信を什方へ（ワキ）と（テ）やれ（ヌル）た汁
（ワキ）君よ（テ）の（オン）供（ツカマ）つ（テ）渡
（ワキ）ぐぞ（テ）

（ワキ）て（テ）ゐ。（スコシ）小（ヲ）使用の
事（ワキ）ゐべ（テ）ぢ（ヂ）まりあまと
（ワキ）（シテ）いつ（テ）ほ（ヲ）ぢ（ヂ）ふ（テ）
（判官）いつ子忠信。（メウザン）當（ワキ）（シテ）昌（ヌル）て作（ワキ）忠信（テ）ゐ
夜討（テ）せべ（テ）ぢ（ヂ）ろ（テ）ぞ一定（テ）ぢ（ヂ）う
角（カク）ぶ神（ワキ）も来（ヨ）ぶ入（イル）洪有をひらゞべ仕（イテ）
人（ニン）頭（トヅマ）り防（フセ）ぎ矢（ヤ）を射（イ）ぞ（ソ）度（イテ）命（イノチ）ぢ（ヂ）
て（テ）ゐ（ロ）沢（ふ）ぢ（ヂ）て（テ）ゆ（ヲ）ぐ（テ）追（オウ）付（ツキ）ゝ（ヌル）（シテ）
（地謡）昌（ヌル）て

家は末ながく栄へ子孫何國迄も隠れ
なく名をきられんとぞ餘人に仰付ら
れんへども辭し申者あらば其時は意
をば背申ゐ人は　いや汝を頼むと言
ふべくの事いかなる人は　我意をば云
で背を犯も一人撰まれ申防矢
仕まとれ御役弓矢の面目な

れば天晴さうとこそへとよ走りあがらへ我君
を始まり皆人ごとに感涙をぞ惜
しみへかくれ縁をとみて御前を立
ぞ家来我と覚ゆる　引ては時刻
移るとて我君頼させ給ひなより
門前を出て同道よすゞひそうて出
のび出給へば　忠信志ぞしは供し

は御眼中に留まればかまへて命を全うし
て御供よしまゐらばは不忠成べし心は
よき御名をあらはし給へば恭しと忠信
は唯独りとまれる心の便も嬉からん
く吉野川原までにて強ぎ
まさく彼およぶ所ならずいふに汎
坊中へ案内申し作 今は夜更人音づ

まねく案内申さむといふ成者ぞ
〽そりあく頼朝よりの仰に随ひ當
山に於て判官殿の御迎にまゐりたり
とうとう出させ給ふべし 〽荒らかに
しや扨も我君に思ひくらぶせとや
よし先軍の心みに嚆矢一筋請て
みよとたか櫓に走りあがりやく

中デ云テ少ノ間ヒヨリヒイテ放ツ矢ヨ先ソウモ矢ゴドウヤコウベ目ヲ塞ヲキテ一度ヨドツトゾホめきり／＼ト引テ手ノ内ヲ切テ刀ヲ抜テ／＼ヨリ右ヨリ脇ヘ文字ヨ切ルトゾ見エシカ空腹切ル櫓ヨリ後ノ谷ヨゾ

ころび落ル敵の兵是ヲ見テよれや者ども首ヲとれと云うち

放り乱入ヲあれきんで震動すきバ

其隙ヨ忠信ハ／＼と急て目ニのかゝり

追ヒそろふ兵ども打ヲとり打ヲとりあやしむる者

なくあれいうまゝ地ヨ

伏隠まぼろし便ふ見ゆるを
上ノ句を通せ面ぐとて
えーぐさ高波きて
兵大かかぐて。
勝うきて。切放ー
乃谷や蝶鳥のごとくふ飛翔つて
の如くふ花翔つて

牛若「なふ〳〵あまた旅人奥へ下り候はゞ御供申し候はん　ワキ「安き間の御事にて候へども御姿を見申せば師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候程に思ひもよらぬ事にて候　牛若「いや我は父もなく母もなし師匠の勘當蒙りたれば唯伴ひて行き給へ　ワキ「此上は辞退申すに及びて此方へ來らせ給へば

牛若「牛若は笠おつとりて今日ぞ始めてうき旅よ　粟田口松坂や四の宮河原逢坂の關路の跡に立てゝ行く商人の主從と成ぞ下りける　うきはうきやの床の古へ都の外の憂き住居こそいと今思ひ粟津の原を打過ぎて

駒もとゞろをふみならし勢田乃長橋
打渡り野路は名のみ露もる山の下紅葉色
て昨日の影もかたぶくおもしろの夕月夜
鏡の宿に着にけり／＼　ワキ詞「急ぐ程に鏡
の宿に着て候此所に宿を借らうずる
みて／＼　牛若「只今乃早打を能々聞候へば我
らが身の上にて候此儘にてハ叶ふまじい
そと髪を切り烏帽子を着東男に身
をやつして下らばやと思ひいふに此所
〈案内申候　シテ「誰にて渡り候ぞ　牛若「烏
帽子の所望に来て候　シテ「何と烏帽
子の所望と候や夜中の事にて程に
明日折りて参らせうずるにて　牛若「急ぎの
旅にて程に今宵折りて給り候へ　シテ「さら

を折りて来らせ給ふにて先此方へ御入候へ扨召候ハ何番に折り候べき 牛若「三番の左折に折りて給り候へ シテ「是ハ仰にて候へど去ながら源家の時にて社候へ今ハ平家一統の世にて候に左折ハ思ひもよらぬ事にて候 牛若「俺ハむにこそ候へ思ふ子細のあるぞ只折りて給り候へ シテ「稚き人の御

事にて候程に折りて参らすまじく候此左折の烏帽子に付いて家の例目出度物語の候それを申さうずるにて候 牛若「さらば御物語候へ シテ「扨も某が先祖にて候者は三条烏丸によしありて候ひし八幡太郎義家安倍の貞任宗任を御追罰ありし時

然るに御上洛ありし某が先祖にて候者に
候。九郎の志ほしとぞきこしめされ、君に御
出仕ありし時、帝なのめに思召し、其時
の御恩賞に奥陸奥の国を給て、我
らも又こよなく嘉例目出度ぞほまれ
にて久しく洪恩ぼしきをわすれて猶代
に出羽の国の守が陸奥の国の守に

かなふる世継の御果報ならべく、代に出なん
時、祝言申し候ずすめと。されて目
出たうき出おきとぞ世継へや表行にも
昔ありきとは志ぼしの九郎のその
折り保平も家と繁昌花なれば梅
と桜、本四季なるも春秋月雪の詠
何までと深白しみやいとのまゝ保元

の其つぎは、中一流の中将と成給ふぞ遊
しもなくそれとても報ひあらべき
時来り、打ち寄る高ぼし様の花ぞうを
仕給へ、かねよ花ひつ、打おく烏帽子
打立て、なをかうかうと
緒を出し、気高く
治定とて、

又れば天晴御器量や、いざ弓箭の
大将とやせん不足よもあらじ
急ぼし給へ、
らうずるまでぞ、
又空りて狂
ばこそ妻子の行ばらん、いたは

牛若
只はしるり
牛若
ちらべ此刀を
いやく烏帽子の代
思ひもよらじ作

作か　ツレ女 何事にてぞ　シテ 稚き人の烏ぼ
しの御所望と仰候程に折りて参らせて
候へば此刀を給りて候あまりに見事なる
作りにて候あら見苦し欲心見えて荒不思議や
か様の事をバ夫のあつかりする事と思ひ
給ハゞさぞあらくと落涙ハ何事にてぞ
ツレ女 恥かしや中々申さむと思へバ言の葉より先

立つものハ涙也　今ハ何をか包む
べき是ハ左馬頭の内海にて果給ひし
鎌田兵衛正清乃妹なり常盤ハずぞら
まハ三男牛若子生まれさせ給ひし時
かうの殿より此腰の物を御守刀
にとて参らせを給ひし其後をバ
らいやて行方も知らず也痛りしや代々代り

てまし〳〵候由申せばかくらうためをば見えまし候
扨は此御腰の物故に涙を流し給ふか　シテ「何と鎌田兵衛
正清の妹と仰候か　ツレ女「さん候　シテ「言
語道断此年月ハ夫婦となれども
今までハ知らず候扨此御腰の物は
さる子細ありて申さでは候はず　ツレ女「さん
候さる子細ある御腰の物にて候　シテ「さて〳〵
是は及びける御腰の物にて候扨は鞍馬の
寺に御座候ひし牛若殿にて御座候
おはしあらば追付此御腰の物をまゐらせ来
らるべしとも後りくや未だ是より
御座候よし見れば女の作りける此御腰の物を
見知りて申し候程に召上げられて給り
候　上牛若カヽル「不思議や汝が知らも知らぬ田舎人

扨我に情の深きぞや　ツレ二人　人まこと〳〵あら
さはなるまじき事ぞ。鞍馬の山の少人牛若か
君とこそなりてけなり　牛若　今こそ思ひ
出したり。扨は清がゆかりの者か
ツレ女　此目の程ありしことよそながら鎌田が
女房に候　牛若　あらやさしのおなか　ツレ女　さん候
牛若　今人知れぬ契りまたは　上同　身の成果

地　扨牛若丸の人ゆひもなくなりぬる身を
語ては主従とこそなるらむここで思ひあまれ
上歌地　さすが東に明けゆく月も名残
の影うつる鏡の宿を立出て　ツレ二人上　痛はしや
扨は此事を名乗る形見の名も
人と結ひし振分けしき我の今の
目もあてられぬ次の情　牛若上　時代に

かゝる習とて、おもてをあはせ、捨寝(ステゴモロ)の
と更(ラ)に思(オモ)ひ
や思(オモ)はれんとて、上(カミ)
まうをよそ(ヨソ)にしばかあ
も、思(オモ)ひ知(シ)らばこそ。思(オモ)ひ知(シ)らぬこそ
とて、高(タカ)人と伴(トモナ)ひ
てきる美濃の國赤坂乃宿(シュク)おゝ
宵(ヨヒ)くに 中人 ワキ 急(イソ)ぎ赤坂の宿(シュク)おゝ
ゆふ吉六 洗(アラ)ふ宿(ヤド)をこゝ
ワキ 是(コレ)より行(ユク)と住(スム)べき
へ 吉六 牛若 面(オモ)しろ行(ユク)
作(ツク)り 牛若 きん
うぜやの 牛若 夜(ヨ)
ゆふ 牛若 旅人(タビビト)合仕(アヒシ)

とてもまぎれたる事にはあらじ
切つてなりとも引ぬかばや
早く頼もしきまでに
のこる作兵衛
退てよみもうすべし
戦場にては
今こそいかに
興津白浪のはいるをば
きりくと
きつねに
あせらもて
と同きてるに
世に似ぬ
もと屋敷
五十騎引
悪甘を
其の術を
夜半過
早いさ
或は対れ
ふ思ふ

みを吉次兄弟あらでいかるまじもの
投打ち去らう有ル 投ゲ打ツ
ムベ年乃狙十二三平成ル稚き者。小太
刀まて切ク廻りの蝶鳥の
如く成ル作テ 投摺リ針太郎兄弟
を 見いやふりの就方とて毫も番
み切ツて入りを。例乃小男渡合。兄弟ふい
者のほて首を。唯下手ふみ落ちなる
すや作テ えいく。何とく。彼者兄弟
吉人等の去五十ツル時百過ぎる場うずるも
のをあく切ル 切ツて切ツて切ツて曲者よ
ワレ 弓康の四郎ふ兄を見て今夜のようちの
しりもんとや思ひ多ゼイ勢七十過ツル
みてうヒイてありて作テ きやつ吉人今よ始

あ臆病者。扨松明の占手ハ如何に ツレ〽一の
松明ハ切て落し 二乃松明ハふミけし
三の松明ハ取て投返してかほと三つなから消
て候 シテ〽まことに大事の松明の占手
とりわけ一の松明ハ軍神 二の松明
ハ時乃運 三ハ我等か命なるに三つなから
消るならバ今夜の夜討ハ扨よかい ツレ〽出張
の如く我等か手にかゝらハ鬼神にてもたまるまじ
敷にや唯引て帰り候へ シテ〽何と盗もい
のちありてこそ物いへ引て帰らう ツレ〽尤
もぞ シテ〽いや熊坂の長範か今夜の夜
討に来て何くに面をむくべきぞ只
責入や若者だと大音上て呼はりけり
ツレ同〽鬨をどつとつくつて切て入けり 上同 荒ものしやれ

の先ちよう〳〵。出そうもあるまい。
みもこゝろぼそく、まだ八幡もおこし賀あま猶
もまつしきてやらうと上月おもふまゝ独
ぜ待兼てまつ上月無坂の長兵衛六十三〳〵
今宵宮詣の夜討きもつと鉄扇をつかんだ
捨五尺三寸の大太刀かぶせるりやと抜ておか
げ。大鳥ぶるみゆらもう〳〵とあもみ出〳〵た

有様ぬの感ず魔界非も面をむこぶ
狐そなきー上月あらそうぐしや盗人よう〳〵
めぐまき鳥あるの夜討なれとも我ふさけ
ぐおかとて通間あらまじ切てあるの無坂
も大太刀つかひの曲者あれべそをつ
ぐり十ケ切八方押や腰車。破れのうへし
かぎはぐり。翁ふらしやきのそぐみ。紙袋重

忌童こりつよりくを出して主のだを
かばて戦ひしが秘蔵の太刀も切られ清右衛門
曹司の小太刀も折れて
、上向にて上下をきりまくりしが
く。組でかつの勝負せとて太刀投
捨く。大ぶ戸
もうひざ雑言へ切まてかつとまろ

びそまが。紀上らんとてにつ立ぶさ高
より声をかりつまらして獨りとんとする
然坂を長く犯を
まあまあ

大龍狸く

早川 昔へい唐土う金山ぜんの藤(フモト)みやう

ふうとやス民ふてゝ我親ゝ孝なルふすり

次第〳〵ふ富貴ス家とゝ成ゞた

ゞ洗ふいぞ〳〵うも志ゞ(ドウジ)まうて教(アマ)タ

ゑり其ゞ酒ゟ買(ケ)ゞ(フ)もまり

てゝうぐゟ成者ゞうとゝもを壽ぎやと

大龍

思ひ作らで〔上ゲ〕滄海の、そこともしらぬ浪間より。顕れ出る日影かな〔ワキ〕今日の市人は何とてか遅く来り給ふぞ〔シテ〕猩々やからべと內に入りても酒を愛しきり琴詩酒とぞ友とするてぬ友人を逢ふらし、いつも変らぬ酒の功さなきだに酒は愛きし方の人の

心より詩を覚れハ琴ともに盃詩ぞにくるみもからうつを稚酒の妙ともさかりの御やうこそ実に市人の秋をも知らむ〔ワキ〕叶程いつくの人ぞもわきまへ姿ぞ今日は酒をなし給へませ〔シテ〕今ハ何をか包むべき是ハ潯陽の江に年久しく住む猩々といへる者

あるかはうの教えを考有ふより天皇
あそれに深きみ恵なるべし泉の壺坪なる
るんあり(上カルニ)鏡(ツリ)にうつるうつくしき顔
(上月)ゆふべのそらもうつろひ
やすくそらくもりぬれば
ぬりの面(オモ)(朱入)もあかくちまよりて市人
よたちまぎれぬ(下)ゆくも(ヲ)

のなどゐ(ヰ)なほ(ヲ)ざりにうち(ウチ)ふぜ(ゼ)いこと(コト)
人(ヒト)上可(ヨクル下可)く狂(クル)ほ(ヲ)しき出(イデ)くる(ル)彼(カノ)う
うみ(ヤ)妙(タヘ)成(ナル)泉(イヅミ)をあ(ア)せ(セ)ま(マ)して浪(ナミ)る
を(ヲ)て湯(ユ)上可(ヨクル)に(ニ)ぞ(ゾ)も近(チカ)く(ク)彼(カノ)
きたり(リ)ウ(ウ)とい秋(アキ)の夜(ヨ)月(ツキ)面白(オモシロ)く
ぞ(ゾ)ぎらの(ノ)あ(ア)そ(ソ)も(モ)こ(コ)と(ト)まづ(ヅ)まりて(テ)教(オシ)への
狂(クル)ほ(ヲ)しき(キ)大(オホ)海(ウミ)もみなぎ(ギ)りぬ(ヌ)泉(イヅミ)の口(クチ)ぞ(ゾ)

ぞえ(エ)しかりとき(キ)あ(ア)
ど(ド)も(モ)く(ク)たてきて(テ)あ
ふ(フ)ま(マ)ぬ泉(イヅミ)ぞ(ゾ)いまも(モ)ま(マ)
て盡(ツキ)ぬ泉(イヅミ)ぞ(ゾ)
返(カヘ)てさづ(ヅ)き盃(サカヅキ)上可
ふ(フ)た(タ)ゝびめぐりあ(ア)ふ(フ)ま(マ)で(デ)
命(イノチ)長(ナガ)えうひ(ヒ)ぢ(ヂ)の酒(サケ)ぞ道俗男女

みなさびにけるかもと
きれいにいまもくらし
よろづよとくりかへす
君千代までとよろこぶ秋
栄ゆる法代そ目出たかりける

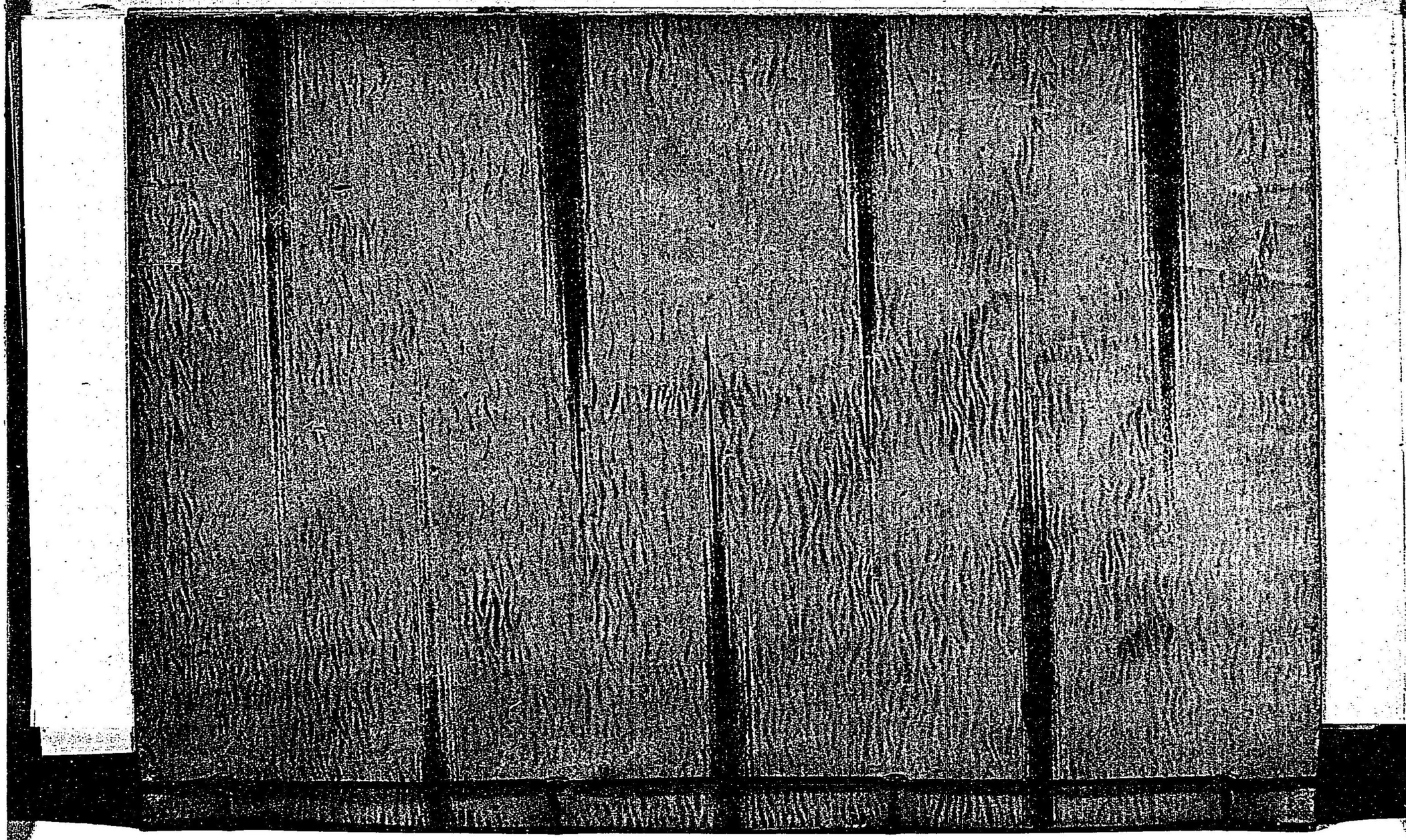
みちさだせそめこそしづまれ
きれいぐいまもくるしくとよう
よろづくとくりことまぐくよ秋ぶせい
君千代までとくみ秋萬歳君よ代迄と
栄ゆる法代そ日出こそ礼

246
183

復製不許

明治參拾貳年六月廿五日從
同　參拾四年一月廿八日迄　出版御届濟
同　四拾參年十月二十五日　再版御届

訂正者　淵觀世清

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂